

平成 30 年度 入学式 学長告辞

春が巡ってきた今日の良き日、入学式が挙行されるに当たり、一言申し上げたい。

Faster, Higher and Stronger! 「より速く、より高く、より強く」

中南米のカリブ海に浮かぶ島国、ドミニカ国の高校の校長アンリ・ディロン神父が、約 130 年前の 1891 年に生徒たちの陸上競技大会で学校のモットーとして述べた言葉です。ほかの人と比較しての優劣ではなく、大切なのは自らをいかにレベルアップしていくかという意味が込められたメッセージです。この言葉は、クーベルタン男爵により近代オリンピックのモットーともされることとなりました。

「より速く、より高く、より強く」すなわち、自らをレベルアップしていくこと、それは「自ら極めること」といってよいでしょう。皆さんの晴れの入学に際し、今後 4 年間の学生生活を前に「極める」をキーワードに、一緒に考えていきたいと思えます。自らを「極める」ため大切なことは、第一に家族や地域の力は大きなパワーを与えてくれるということです。

2・3 月に開催された平昌オリンピック・パラリンピックでの日本選手の活躍に多くの国民が感動したと思います。その際に気づきませんでしたか? 選手の父や母の果たした役割や「相沢病院」、「土屋ホーム」、「LS 北見」などこれまで国民があまり耳にしてなかった支援者の名前や支援の方式がテレビ放送にあふれたことを。そこに共通するのは、地域・地方の底力や家族などの小さい支援の輪が、じっくりと時間をかけてトップレベルのアスリートを育てることにつながったということです。

そう! 極める場は、遠くにあるものではありません。皆さんの身近なところにあるのです。今日入学する皆さんは、この 4 年間で何を極めようとするのか、今この時から考え、身近な人々との交流・支援の輪を育みながらじっくり取り組みましょう。

Make haste slowly! 急がば回れです。

「より速く、より高く、より強く」「極める」の第二は、本学への入学を機に、物事を「科学的に考える」ということです。

皆さんの多くは、体育やスポーツが好き! 得意! という方が多いと思います。でもその練習は、ぎりぎりまで体を痛めつけ苦しくとも頑張るといったことが多くありませんでしたか?

現在、帝京大学のラグビー部は、大学ラグビー大会で 9 連勝しています。帝京大ラグビー部の岩出監督は、初めて帝京大学に来た時のことを振り返っています。すべての学生が典型的な体育会系的な練習に明け暮れ、

根性や忍耐重視、上下関係でのしごきなどの中で、部員に笑いはなく漂うのは悲壮感のみ、試合では他の強豪大学には勝てない…。やがては焦り！

これを見て岩出監督は考え抜き手を打ちます。それまでの練習方法を見直し、スポーツ競技にとり極めて大切な「心」、すなわちスポーツ競技の際の心の持ちよう、「技」、すなわち競技力（ハイパフォーマンス）、「体」、すなわち強靱な体力・良好な体調…。この心技体という3つ要素を体育スポーツ科学の視点で見直してみたことです。心はスポーツ心理学を駆使し、技はコーチング理論を活用し、体はトレーニング理論、スポーツ医学、運動生理学などで考察する。その結果どうなったか。部員の中に「科学的な思考」が生まれ、練習や試合では「自ら考えての創意工夫」が生まれ、厳しい練習も「自ら楽しんで行う」雰囲気が生まれ、部全体の組織が活性化し、9連覇につながったと述べています。

総合的体育大学である本学では、体育スポーツ科学の基本を新入生の皆さんは履修することになります。「より速く、より高く、より強く」を極めるために、①科学的な思考②自ら考える③楽しむという「3拍子揃った」新しい取り組みを追求していきましょう。

「より速く、より高く、より強く」「極める」の第三は、身近にある資源を見出し、その資源をどん欲に活用し、自らの持つ力を極めるということです。

今日から皆さんは本学のキャンパスで多くの時間を過ごすこととなります。まずは、キャンパスにある体育・スポーツ施設などの物的資源やそこで展開されているシステムなどの探索から始めてください。5つの体育館とサッカー、野球、ラグビーの練習場、公認陸上競技場、国内トップレベルのトレーニングセンター、高地トレーニングを体験できる低酸素室、全米オープンテニス会場と同レベルのテニスコート、大学で唯一のスケルトン・ボブスレーのプッシュトラックなどが皆さんをお待ちしています。

また、本学の持つ人的資源にも着目してください。キャンパスには、今日、皆さんの右手に列席されていますが、一学部6学科の多士多彩な先生方がおられます。このキャンパスでこれから、競技指導実績や教育研究実績の豊富な諸先生の研究室のドアを臆することなくドンドン叩いて良き先生と巡り合っていただきたいと思っています。スポーツをはじめ、あらゆることに挑戦できる一つの聖地が本学のキャンパスには凝縮されていると言っても過言ではありません。

新入生の皆さん、2020年には東京オリンピック・パラリンピックがあります。ここで、あるパラリンピアンが講演で訴えた言葉を紹介しておきたい。このパラリンピアンは練習試合のため車いすでJRに乗って競技会場のある都心から離れたある駅に着きました。残念ながら、そこにはホームから改札口に上るには階段しかありませんでした。「ドウシヨウ！」と焦ります。乗降客は忙しく脇を通りすぎています。遂に、乗降客がマバラになってしまいました。そのとき、あることが起きました。一人の通りかかった若者が大きな声で、「皆さ

ん、この車椅子の方が階段を登れなくて困っています。だれか手を貸していただけませんか！」と呼びかけたのです。

すると今まで無関心を装っていた多くの人が振り返ってくれました。6人の男性は持っていたカバンをホームに置き車椅子を持ち上げて、「よいしょ！よいしょ！」と一つの即席のチームが出来上がりました。

このパラリンピアンは、感謝を込めてこうっています。「私たちの戦いは、『競技での戦い』だけでなく、『一般の方々の障がいを持つ人々への無関心さとの戦い』でもあるのです」と。

より速く、より高く、より強く そこには「思いやりをも極める強い人間像」が求められていると感じます。本学では、そういう強い人間力を持った学生諸君を教職員一丸となって育てていくということにも意を用いていきたいと思えます。保護者の皆さんや地域の方々のお力をお借りしつつ。どうか来賓の皆さま、保護者の皆さまよろしくお願いたします。

最後に、皆さんは未だ小さなかわいいつぼみです。平昌オリンピックの選手団長小平奈緒選手は、日本選手の活躍を期待し「百花繚乱」と述べました。哲学者三木清はその著「人生論ノート」で、ヨーロッパの中世の封建主義に一矢を放ち改革を極めたルネッサンス運動の中に、ロマンをみると述べています。今後4年間、皆さんは多くの問題に直面し、多くの挑戦が求められます。今後、4年間を通じ、皆さんが「より速く、より高く、より強く」を極め、皆さんなりの個性とロマンにあふれる「百花繚乱」の華を咲かせることを願っています。また。それを楽しみにしています。

平成30年4月4日

仙台大学 学長 遠藤保雄